
『運命』は信じないけど『宿命』は信じるんだよ！

パンドラ・L・ロジャー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『運命』は信じないけど『宿命』は信じるんだよ！

【Nコード】

N5529Z

【作者名】

パンドラ・L・ロジャー

【あらすじ】

ごくごく一般的な少年『黒覇 裏亜』は、『この世界は本当にひとつだけなのか』という悩みを持つ。その悩みを理由に、ひよんなことからもうひとつの世界の存在を知ってしまう。様々な人間から期待されつつ、彼と、その仲間たちで、異世界のバケモノ『ジョーカー』に立ち向かっていく、異色ファンタジー。

第1話 リア、スタートを切る

朝、起きたら、なぜかパソコンを使いたいという衝動にかられた。一階にいつてないけど、なぜか母さんがいないことが分かる。いたらもつと騒がしいはずだ。

オレの名前は、『黒霸^{くろは}裏亜^{リア}』。現在、13歳。恰好は、君に任せする。

パソコンを付けた。最近オレは、いろんなサイトを見比べている。これはある悩みのせいだ。

悩みっていうのは「この世界は本当にひとつかってこと」。まあ、オレが異世界ものの漫画が好きだからかもしれない。でも、多分それは関係ない。まあ、その悩みにはあまり触れないでおこう。

「何だこれ？」

気づけば、何か変なサイトに行っていた。無論、オレは何もしてない。戻ることもできないし、消すこともできない。一回、強制終了を試みようと思ったけど、電源は切れない。

『悩み、募集中』。そう書かれた掲示板。悩みを書いてみようか？別に、誰にも笑われはしないし。

『誰がいる？』

返事はない。チャット系だから、多分このオーナーはこれを管理して、多分今も現在進行中で見ているはず。

『悩み、言っぞ？』

返事はないけど、一応、書いておきたい。

『世界は一つだけじゃないと思う。多分、まだひとつはあるはずだ』

まだ返事はない。続けようか迷ったが、続けるしかないよな。何を打つのかは頭の中では考えてないけど、サラサラと指が動く。昔からそうだ、機械を扱うのは得意なほうなんだ。

『理由はないけど、多分、ある。世界はひとつじゃない』

『その通りだ』

返事が来た？おそらく、このオーナー。しかしそれ以上に、こいつの反応が気になった。『その通りだ』？こいつもオレと一緒に、あたまがおかしいのか？

『どつという意味だ？』

『この世界はひとつでは無い。もうひとつある。それに私の名前は「アカルス」。何か質問は？』

『なぜそう、断言できる？なんなら、オレもそこへ連れて行ってくれよ、アカルス』

『君なら、行けるかもしれない。集合場所は君の家にもっとも近い橋の下』

「え、ちょっと待て！」

つつい、声に出た。だが、オレの意思とは反対に、パソコンの画面は真っ暗に消えてしまった。さっきは消せることが出来なかった

のに。

本当に、ヤバくなってきた。行ったほうがいいのか？でも、これ
がもし、オレの悩みを解消するキツカケになるなら、行ったほうが
いいよな？

オレは、パソコンを閉め、服を着替え始めた。

「つたく、ふざけやがって」

思わず口から声が漏れた。そう、ふざけてる。イタズラだ、迷惑メ
ー的なものだ。そう思いたかったけど、心の中のオレが言った『
二度とないチャンスかもよ？』

だよな。

で、これにいたる。橋の下には誰もいない、アカルスってやつも
いない。と思っていた。

「おーい！おまえがリアカー？」

川の向こう岸から聞こえる、少年の声。ずっと足元を流れる川ばっ
かり見てたから、前を見てみた。川の向こう岸に、銅色みたいな髪
で、青いジャージを着た少年が立っている。オレと年代が同じよう
だから、おそらく13、4歳ぐらいだろう。

「おまえはー？」

少年は、オレのほうに向かって、手でストップサインを作り、川
を歩いてきた。バチャバチャという音が気になったが、少年はそん
なこと気にしていない。

「オレの名前は、メノウ・スーラス。
バイロット 侵入者だ」

「パイロット？っていうか、アカルスは？オレはアカルスと待ち合わせしているんだ」

「そう固いこと言うなって！」

少年　メノウと名乗るこの少年　は、まるで前からオレの友達だった様に、背中をバシバシ叩いてくる。こういうヤツは、別に嫌いじゃないが、好きでもない。

「アカルスの代わりに来たんだ。えーっと、そのー、あれだ。来れないって言うから！まったく、世話が焼けるぜ」

「で、これからどうするんだ？どこかに行くんだろ？」

「その話はまたあとで！さあ、ついて来い！リ……、なんて呼べばいい？」

「リアで良いよ」

「じゃあ、リアー！レッツ、ゴー！」

こんなハイテンションにはついていけない。でも、何だか楽しそうだ。

はたして、何キロ歩いただろうか？オレはランニングみたいな感じで走っているが、メノウはそう苦労していない。手を頭の上で組み、その状態で、スキップみたいに走っている。

「メノウ、どこにいくんだよ？」

「んー。集場所?」

「集場所は、橋の下だろ?」

「まあまあ、そういうことは気にするなッて!」

いや、気にするだろ。そう呟いたが、メノウには聞こえない。

「よし、ここで良い」

メノウは、河川敷上にある道路でとまった。メノウはポケットからケータイを取り出し、誰かに電話をかけ始めた。

「なあー。まだかよー、いや、それは謝るッて!だからさ、車!」

メノウはまだ気づいていないのか?メノウは道路に背を向けて喋っている。車が欲しいらしいが、もう車は来ている。リムジンみたいな黒い車で、全体が黒光りだ。

運転席から、白髪で、執事みたいな服装のおじいさんが出て来た。老眼用か、メガネをかけている。おじいさんは後部座席のドアを開けた。中から、スーツに身を包み、黒いサングラスをかけた男が出て来た。

「こいつが?」

スーツ男は、オレのほうを見ていった。おそらく、オレの事だろう。

「ああ、橋の下。時間ピッタリに来た。覚悟はできているんじゃない

いか？」

「だが、全てを選ぶ権利は、このこいつにある」

「じゃあ、いま選択させれば良い」

一体何の事を言っている？選ぶ、選択？権利？オレが何を決めるっていうんだ？

「メリー」

スーツ男が言った。後ろでおじいさんが小さく頷いた、彼がメリーだ。スーツ男は振り返り、片手を差し出した。メリーはポケットに手を入れ、何かを取り出し、それを差し出した手の上に乗せた。

スーツ男が振り返った。さっきは片手で持っていたが、ふたつ以上あるのか、両手で持ちだした、両手を握っている。

「では、聞こう。本当に、もうひとつの世界を知りたいのか？」

オレは戸惑ったが、少し遅れて頷いた。

「苦痛の連続、悲しみの連鎖。この世界にいるほうがいくぶんマシだ」

「……」

オレはどう答えればいいのか分からなかった。「そうですか」とも、「まあ、大変」とも、どちらも言えなかった。

スーツ男は、両手を差し出し、開けた。右手には、黒く『1』と書かれた、赤い小さな、錠剤みたいなカプセル。左手には、黒く『

0』と書かれたこれも青い同じカプセル。

「『0』を選べば、私達の事もすべて忘れ、今までの悩みも消え、ごくごく一般的な人生を送れる。反対に、『1』を選べば、このまま不思議の道进行、真実を知る。どちらも、選ぶのは君だ。自分の心の思ふままに選べ、それを飲み込め」

そう言われたが、心の中ではスーツ男に言われた言葉が気になる。
『苦痛の連続』、『悲しみの連鎖』。何が待っているのか分からない。

オレは、ゆっくり、青い『0』のカプセルに手を伸ばした。視界の端で、メノウがっかりしているのが分かる。

「どうだ、今の気持ちは？」

スーツ男が聞いた。オレの差し出した手が、ピタッと止まる。オレは顔をあげ、スーツ男を見た。

「むりに答えなくていい。私は君を、詳しくは知らない」

なあ、少しは知っているんだ。心の中で誰かがつぶやいた。

「しかし、君は心の中でこう言っている。『逃げる』と。しかし、もう一人のほうは……？おそらく、こう言っているだろう。『逃げる気か？』」

「よくやった」

気づけば、オレの手は、赤い『0』カプセルをつかんでいた。水なしでも飲めるらしい、誰も水を出そうとはしない。

「本当にいいのか？最終的に決めるのは、自分だけだ」

「ああ、もう悔いはない」

オレは、カプセルを飲んだ。やけに首につまる感じがした。オレが飲み終えたのを、スーツ男が確認すると、サングラスをとり、オレの目を見始めた。

「なるほど」

「効果は？」

メノウが聞いた。この薬には、何の効果があるんだ？

「なかなかだ。侵入するのに問題はない」

何を話しているのか、よく分からなかったが、聞かないでおい

「で、オレは今からどこに？」

「知らなかったのか、メノウが言ったものだ。我々の本拠地^{ホーム}だ」

「ホーム？っていうか、あなたは誰ですか？」

スーツ男は、サングラスをかけなおし、リムジンのほうに歩き始めた。

「気づかなかったのか？もう気づいたものかと」

いや、正直、オレもおまえが誰か知っている。

「アカルスだ、さあ、行くぞ」

メノウは、また楽しそうに手を頭の後ろで組み、リムジンのほうにスキップしだした。アカルスは、助手席に座り、メリーは運転席に座ろうとしている。

後になって後悔した。

そうなんだ。

オレは、異世界に行くための準備を、完璧に整え、今から行こうとしていた。

第1話 リア、スタートを切る（後書き）

何たって、まだまだ12歳なんで（笑）。しかも、小六なんで（笑）。

何か欠点とか、もっとこうすれば良いとかあれば、ジャンジャンお願いします！それと、サラッと言っただけで良いんで、ロコミでも広げてくれればなー、と。

けっこうな長編小説にしようかなーってところですよ。皆さんのアドバイスが、面白くさせてくれるので、これからも宜しくデス。

第2話 リア、真実を知り、少し天狗になる

黒いリムジンの中では、まさに『沈黙』だった。

運転しているメリーとアカルスは、まったく喋ろうとしない。オレも何を喋ったら良いのかわからない。メノウは、ループブック・キユーブをそろえてはガチャガチャにし、そろえてはガチャガチャにしている。メノウは、こういう静かな場が苦手なのだろう、さっきからずっと、貧乏ゆすりをしている。

「ああ、もう！なんか喋れって！」

となりでメノウがものすごい勢いで立った。天井に頭が当たったのは、勘弁してやってくれ。

「なら、何を話す？案はあるんだろ？」

アカルスの言うとおりだ。何を話すんだ？

「あ！ホラ！自己紹介！まだ詳しく話してないだろ！？」

メノウが、天井でぶつけた後頭部をさすりながら、座った。

アカルスがため息をつきながら、喋りだそうとしている。面倒くさいというのが、恐ろしく伝わってくる。

「アカルス・ベン・ノーベリック。『ガーディアン』の最高責任者だ」

アカルスの本名は、「アカルス・ベン・ノーベリック」なのか。

「ガーディアン？」

「これから、オレたちが行くところ。行けば良くわかる」

オレたちが行くところ？ガーディアン……。一体どういう場所なんだ？

「では、つぎは私が」

運転席に座っているメリーが言った。

「本名、メリー北河きたがわでございます。『ガーディアン』の養成係で、スナイパーでございました」

また、ガーディアン。でも、それ以上に気になったことがあった。

「スナイパー？」

「ガーディアンにしたら、詳しく教えてやる」

アカルスはオレをそうやって止めた。横でメノウは、そろえたルービック・キューブをオレとメノウの間において、話し始めた。

「ヨシッ！オレの番だな！？本名メノウ・スーラス。ガーディアンでは、侵入者バイロットをやってる！」

その後、重苦しい沈黙が流れた。騒ぎは一時的、すぐに終わってしまった。ヤバイ、オレが話題を出さなきゃ！

「あの……！」

「着いた」

アカルスがそう言っで、オレを見てきた。「何か？」とでもいいたげだ。

「リア、なんか言おうとしたか？」

メノウは、席に置いていたルック・キューブを手に取り、またガチャガチャに始めた。どうせ、すぐにそろうだろう。

メノウは、アカルスとメリーを抜き、先頭に立ち、両手を空高く上げた。

「いやー、久しぶりだなー！何年振りだろ？」

そんなに来てないのか？何年ぶり？

「三時間ぶりだ」

アカルスが歩きながらメノウの頭をポンツと叩いて言った。

っていうか、ここはどこだ？気づけば、森林に囲まれた空き地みたいなおところだ。

「ここは？危なくないか？」

オレは、目の前に建てられた木の看板を見ながら言った。看板には、『危険！ 注意！ 近寄るな！』って書かれている。

「ちょっと失礼」

メノウが、手をチョップみたいな形にして、オレの前に、看板の前に立った。

「ガーディアン」

看板にはそんな文字、書かれない。すると、看板の根元が、四角形に開きだした。看板は、そのまま黒い四角形の暗闇に沈んでいった。そしてできた四角形は、一辺１メートルぐらいで、人が入れそうだ。さらに暗闇の中がライトで照らされた。

暗闇の中には、階段があった。

「ようこそ、リア。ここが、^{ガーディアン}守護者だ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5529z/>

『運命』は信じないけど『宿命』は信じるんだよ！

2011年12月20日18時04分発行